

第 **1** 章

学習基本調査の結果から  
みえること

西島 央



## 調査の結果からみえること

### 1. はじめに ～中学生の学習をめぐる

ここ数年、子どもたちの学力低下が懸念されたり、保護者の中高一貫教育に対する期待が焚きつけられたりと、小・中・高校生の学習をめぐる、おとなたちや社会の関心は非常に高くなっている。実際、なんらかの学力テストの結果やさまざまな学校の進学実績などの数字を目にしない日はないというくらい、小・中・高校生の学習の“結果”はさまざまなメディアで取り上げられている。

しかし、そのような数字からは、当の小・中・高校生が日頃学習に向かう“姿勢や考え方”はほとんどみえてこない。彼らは、どのくらい勉強しているのだろうか。どんなふう勉強しているのだろうか。日々の学習や将来についてどのような悩みや希望をもっているのだろうか。学校の学習指導のあり方をめぐる議論は百家争鳴だが、彼らの学校での勉強の様子はどのようなのだろう。学校と地域・家庭との連携ということもいわれているが、彼らの家庭での勉強の様子や保護者のかかわり方はどうなっているのだろうか。こういった小・中・高校生の学習に向かう姿勢や考え方の実態については、ほとんど知らされていないまま、子どもの学習に対する、おとなや社会の懸念や期待だけがどんどん膨らんでしまっているのである。

2006年に行われた第4回学習基本調査では、中学生の学習に向かう姿勢や態度につい

て、さまざまな角度から調査した。その結果、第3回までの調査結果と比較して、学習にかかわる中学生のイメージとして4つの特徴が浮かび上がってきた。

第一に、まじめになった。第二に、学習するようになった。この2つの特徴からは、「ゆとりから脱ゆとりへ」という流れを読み取ることができよう。しかし、そのまじめさは受け身で、その学習は学校の勉強に閉じたものであった。与えられた課題を機械的にこなすのに追われるばかりで、自分から主体的に課題をみつけたり、プラスアルファの学習をしたりする姿はみえてこない。

さらに、「日本の中学生は…」と一括りにして語ることでできない状況になってきた。つまり、第三に、地域や家庭間の格差が大きくなった。第四に、成績差が大きくなった。学習に向かう姿勢や考え方に、学習環境に恵まれた地域や家庭の中学生とそうではない中学生の間の、また、成績上位層の中学生と下位層の中学生の間の違いが、非常に大きくみられるようになり、中学生の分化が進んできたと考えられるのである。

本報告書では、中学生の学習に向かう姿勢や考え方について、一つひとつの調査項目ごとにいねいに分析をしているが、本章では、それらの分析を結びつける横糸となるべく、上記の4つの特徴ごとに分析結果を概観していくことにしたい。

## 2. 2001年以降の中学校教育をめぐる動き

分析結果の概観に入る前に、第3回調査が行われた2001年以降の中学校教育をめぐる動きを簡単に確認しておこう。

この間の中学校教育に何より大きな変化をもたらしたのは、2002年度から完全実施された学習指導要領の改訂である。完全学校週5日制、学習内容の精選、「総合的な学習の時間」の導入、選択教科等にあてる授業時数の拡大など、ゆとり路線と、一人ひとりの個性にあった教育という新自由主義的な発想に従って、それまでの中学校教育のしくみを大きく変える内容となっていた。

ところが、1998年に告示された学習指導要領の移行措置が進む過程で、新しい学習指導要領に基づく教育では子どもたちの学力低下を招くのではないかとの批判が起こった。そこで文部科学省は、学習指導要領の完全実施の直前に『学びのすすめ』を発表して、「確かな学力」の向上を目指す姿勢を打ち出した。学習指導要領の示す内容をより深める「発展的な学習」を扱うことが認められたり、基礎・基本の確実な定着を目指す指導や学ぶ習慣を身につけるような指導機会の充実が求められ

たりするようになった。

学校選択制の導入や初等中等教育段階の学校の多様化もますます進んだ。特色ある学校づくりは、たとえば東京都では数値目標を設定させるなど、1990年代後半から取り組まれていたが、ここ数年は、いくつかの地域や学校では学力テストの結果を公表するなど、学業達成度による競争がなされるようになり、その結果を参考にして学校選びをする保護者が増えてきた。また、公立の中高一貫校も、その形態は併設型、連携型、中等教育学校とさまざまなが、この間に30校ほどから130校を超えるほどにまで急速に増えてきた。

つまり、第3回調査が行われた2001年は、ゆとり路線が一番進んだ状態にあり、2002年度からは、しくみはゆとり路線をベースにしながらも、実態は、確かな学力の向上とそのもとでの学校の多様化へとシフトしてきているととらえることができよう。

このようなしくみと実態のズレの狭間で、中学生たちの学習に向かう姿勢や考え方がどのように変化し、どのように多様化してきているのかをみていくことにしよう。

## 3. 中学生の学習に向かう姿勢や考え方の4つの特徴

では、「①まじめだが受け身」「②学習するが学校に閉じている」「③地域・家庭間格差」「④成績差」の4つの特徴から、中学生の学習に向かう態度や考え方について、分析結果を概観していくことにしよう。なお、本章で取り上げる数値は、巻末基礎集計表や本文中の図表のものであり、一部掲載されていない数値も含まれている。

### ① まじめだが受け身

第一の特徴は、まじめになったということ

だ。その様子は、次のようなデータからいえるだろう。まず、学校の授業中の様子を見てみると、「黒板に書かれていなくても、先生の話で大切なことはノートに書く」(第3回53.6%→第4回56.8%、「よくある」+「時々ある」の%、以下同)、「授業でわからないことは、あとで先生に質問する」(28.3%→35.4%) 比率が数ポイント増加しているなど、学習態度がまじめになる一方で、「マンガをかいったり、文房具で遊ぶ」(28.8%→25.7%)、「ぼうっと他のことを考えている」(61.0%→55.3%) など、授業に集中していないとみら

れる逸脱行為は減っている。

また、家での学習の様子をみると、「嫌いな科目の勉強も一生懸命する」(第3回72.6%→第4回74.7%、「あてはまる」+「まああてはまる」の%、以下同)、「計画を立てて勉強する」(44.1%→50.9%)、「授業で習ったことは、その日のうちに復習する」(41.8%→48.9%)、「家族に言われなくても自分から進んで勉強する」(61.7%→65.8%)などのまじめな勉強態度や、まだまだ少数派ながらも「毎日こつこつ勉強する」(27.3%→33.2%)という地道な勉強タイプが増えてきている。

ところが、これらのデータから中学生の勉強に向かう態度がまじめになったと手放しで喜ぶわけにはいかないようだ。というのも、学校で好きな勉強方法としては、いわば伝統的な勉強方法である「先生が黒板を使いながら教えてくれる授業」(76.4%「とても好き」+「好き」の%、以下同)がもっとも高く4分の3を超えているほか、「ドリルやプリントを使ってする授業」(第3回43.5%→第4回49.0%、以下同)も第3回より支持を増やしている。これらの勉強方法は、教師の側からは時間をかければ学力向上につなげやすいものの、生徒の側からすれば受け身な勉強方法である。

その一方で、「いろいろな人に聞きに行っている授業や調査」(45.3%→41.3%)、「学校のいろいろな場所に行っている授業や調査」(70.7%→67.4%)、「考えたり調べたりしたことをいろいろ工夫して発表すること」(34.5%→31.5%)など、近年増加している「自ら主体的に学ぶ」勉強方法のなかでも、実際に生徒たち自身が動かなければいけないような勉強方法への支持には変化がみられない。

家での学習も第2章で詳しく分析しているように、「学校の宿題」や「復習中心」で「学校で使う教材中心」に行っていて、「予習中心」にして学習内容を先取りしたり、「書店などで売っている問題集・参考書」を使って学校以外の学習を中心にしたりする中学生は

少ない。また、「毎日こつこつ勉強する」わりには、「辞書(英語・国語など)を引く」(37.2%「よくする」+「時々する」の%、以下同)、「参考書を読む」(34.7%)、「図鑑や事典で調べる」(14.1%)といった手間のかかる作業は敬遠され気味である。

このような姿勢は、学習に対する考え方からもうかがえる。学習上の悩みは、「上手な勉強の仕方がわからない」(68.3%)、「覚えなければいけないことが多すぎる」(56.9%)、「わかりやすい授業にしてほしい」(51.3%)といった悩みが上位を占めており、勉強しなければいけないことはわかっているまじめな気持ちがある反面、それが行動としてはなかなかうまく取り組めていないもどかしさが見受けられる。また、学力観としては、「できるだけいい高校や大学に入れるよう、成績を上げたい」(第3回57.8%→第4回61.9%、以下同)と思う比率と「どこかの高校や大学・短期大学に入れる学力があればいい」(45.9%→49.4%)と思う比率が、どちらも増加傾向にある。学校からいわれてせっかくまじめに勉強しているのだから、それなりの結果はほしいけれど、自分で思い切り背伸びをすることはないか、というところではないだろうか。

確かに中学生はまじめになった。しかし、まじめにはなったが、それは、学校の教師から与えられた課題をきちんとこなすという受け身のまじめさであって、自分から能動的に、また学校の勉強の範囲を超えて学習に取り組もうというまじめさではないようなのである。

## ② 学習するが学校に閉じている

第二の特徴は、学習するようになったということだ。「『勉強は学校だけですればいい』と思う」という質問に「あてはまらない」(第3回51.7%→第4回56.5%)と回答した比率が過半数に達しており、しかも第3回から約5ポイント増加しているように、中学生は、学校の授業以外にも勉強しなければならないことをわかっている。そして実際に、家で週

に何日勉強をしているかたずねたところ、「ほとんど毎日する(週に6~7日)」(第3回18.7%→第4回28.5%)がもっとも多く、かつ第3回から10ポイント近く増えている。また、学校外での1日あたりの平均学習時間(第1回96.9分→第2回90.0分→第3回80.3分→第4回87.0分)も、第1回から第3回までは減少傾向にあったのに、第4回では約7分増加している。

学校外での学習時間の増加は、各教科の理解度にも好影響を与えているようだ。つまり、学校の授業が「ほとんどわかっている」+「70%くらいわかっている」中学生の比率は、「数学」(第3回53.5%→第4回57.5%、以下同)と「理科」(46.5%→52.3%)で第3回より数ポイント増加している。

以上のように、中学生は学習するようになったし、理解度も上がっているのである。しかし、その学習の中身をみると、やや問題を感じずにはいられない。

家での学習の様子をみてみよう。まず、家での勉強内容をみると、もっとも多いのが「学校の宿題」(87.4%)で、つづいて「学校の授業の復習」(45.1%)である。それに対して、「書店などで売っている問題集・参考書」(第2回31.1%→第3回24.7%→第4回17.6%)で自分から取り組むような勉強内容は、調査のたびに減っている。次に、もう少し詳しく勉強の様子をみると、「出された宿題をきちんとやっていく」(89.1%「あてはまる」+「まああてはまる」の%、以下同)がもっとも高い。確かに、宿題をしている時間の平均(38.7分)は家での学習時間の44.5%も占めている。また「予習をしてから授業を受ける」(第3回34.9%→第4回42.2%、以下同)、「授業で習ったことは、その日のうちに復習する」(41.8%→48.9%)は増えているのに、「授業で習ったことを、自分でもっと詳しく調べる」(39.2%→42.8%)はあまり増えていない。

さらに、日常生活の中での「学習」の様子をみると、「読みたい本を本屋で探して

買う」(69.9%「よくする」+「時々する」の%、以下同)、「文学作品や小説・物語を読む」(53.5%)は、過半数に達しているが、「自然や動物・植物の本を読む」(20.7%)、「新聞のニュース欄を読む」(43.9%)、「美術館や博物館に行く」(10.6%)といった、授業の延長に位置づくような学習や実際の社会勉強や生涯学習につながっていくような学習をしている比率は決して多くはない。このことは、学習に対する考え方からもうかがえる。つまり、自然や社会のしくみについて学習をしているときに、「すばらしい」「ふしぎだな」とか、調べたり考えたりするのが好きだと感じるかどうかたずねたところ、5~7割ほどが「すばらしい」「ふしぎだな」と感じるのに、調べたり考えたりすることが好きな中学生は4~5割にとどまってしまう。学習を通して受けた知的好奇心のような感覚を行動によってさらに深めようという取り組みには必ずしもつながってっていないのである。

確かに中学生は学習するようになった。学習時間は長くなったし、授業の理解度も上がった。しかし、それは、学校の授業にかかわる予習・復習・宿題などの範囲での学習であって、学校で学んだことをきっかけにさらに深めていくような学習や、日常生活の中で経験を積んでいくような学習ではない。つまり、中学生は学習するようにはなったが、その学習は「学校の中に閉じている」という問題点があるのではないだろうか。

## ③ 地域・家庭間格差

第三の特徴は、地域・家庭間格差が大きいということだ。これまでの多くの調査は、「日本の中学生は…」という論じ方で調査結果を分析してきた。日本の中学生なら、大都市でも郡部でもどんな家庭でもだいたい同じように学習できる環境にあるものだという大きな前提のもとで、そうした差にはあまり注目してこなかった。ところが、今回の調査結果を概観してみると、中学生自身に起因しな

い条件である地域の違いや家庭環境の違いで、彼らの学習の様子に大きな差がみられたのである。

#### 《地域間格差》

先に地域間格差についてみてみよう。まず、週何日勉強するかという家庭学習の頻度をみると、「ほとんど毎日する(週に6~7日)」+「週に半分以上はする(4~5日)」の比率は大都市29.9%、地方都市35.5%、郡部81.4%と、大都市・地方都市の中学生は家で勉強する日数が少ないのに対して、郡部の中学生は大半が週の半分以上家で勉強している。ところが、1日あたりの学校外での勉強時間(平均時間)では、大都市1時間21分、地方都市1時間32分、郡部1時間27分となっていて、学習頻度の地域差に比べれば非常に小さい差でしかない。家庭学習の頻度と学習時間のこのようなズレの理由については、第2章第1節に詳しいので、ここではいねいには説明しないが、通塾率(大都市49.3%、地方都市59.5%、郡部20.4%)は大都市・地方都市で高く、宿題をする時間(大都市33.1分、地方都市31.9分、郡部50.0分)は郡部が長いという地域差と組み合わせて考えると、大都市・地方都市はどちらかといえば塾中心なのに対して、郡部は家中心と、学校外での勉強の場が地域によって大きく違うことがわかる。

そのことは、家での学習の様子の違いにも表れてくる。家での勉強内容は、「学校の宿題」(大都市81.8%、地方都市87.0%、郡部92.7%、以下同)や「学校の授業の予習」(15.2%、26.5%、26.2%)では10ポイントほどの差しかないものの、「学校の授業の復習」(32.1%、30.4%、70.8%)は郡部のほうが圧倒的に多くなされていて、逆に「塾や予備校の授業の予習・復習」(33.1%、36.6%、12.6%)は、大都市や地方都市に多くみられる勉強内容だ。勉強内容の違いは、勉強のしかたに影響している。家庭学習の頻度の差からも類推できるように、「毎日こつこつ勉強する」(23.0%

%、25.5%、49.6%)は、郡部が大都市・地方都市の倍くらい多い。通塾率や宿題の量の差が影響しているのだろうが、勉強の際に用いる教材が「学校で使う教材中心」(62.7%、57.2%、76.7%)なのは郡部にやや多いのに対して、「通信教育、学習塾の教材や自分で買った教材中心」(31.0%、39.9%、19.2%)なのは大都市・地方都市にやや多い。

つまり、学校で勉強したことをさらなる学習によってどうやって身につけるかということが、大都市・地方都市の中学生は、塾へ週に2~3回行って、塾や市販の教材を使いながら勉強するのにに対して、郡部の中学生は、先生が出した宿題を中心に、学校の教材を使って家で毎日勉強するというように違っているのである。

学習に向かう姿勢に地域差がみられるということは、学習に対する考え方にも地域差がみられるのではないだろうか。学校の勉強と結びつきの近い学力観をみると、「学校生活が楽しければ、成績にはこだわらない」(34.2%、27.1%、26.8%)、「今は勉強することが一番大切なことだ」(24.6%、31.9%、31.3%)と、地方都市が郡部と似た傾向なのはここまでみてきたデータとは異なる傾向ながらも、大都市に比べて郡部のほうが成績や勉強することに対して高い価値をおいている。この結果は、家庭学習の頻度が高かったり、学校の宿題や復習をきちんとしたりする郡部の中学生の学習に対する姿勢と合致する。ところが、進学希望をみると、「四年制大学まで」+「大学院まで」が大都市43.0%、地方都市42.4%、郡部24.3%と、郡部に比べて大都市のほうが20ポイントほど多く高学歴を求めている。勉強していい成績をとることと高学歴を得ることの意味は一致していないし、意味づけ方には地域によってズレがあるのだ。

以上をまとめると、学習の量や内容や意味づけ方に、大都市、地方都市、郡部で違いがみられることがわかる。地域ごとの特徴があるのはけっこうなことであるが、中学生自身

が好むと好まざるとにかかわらず、地域によって彼らに提供できる学習環境に違いがあることで、学習の量や内容や意味づけ方に違いが生じ、それが結果として得られる知識や学歴の違いにまでつながっていくとしたら、それは地域間格差の問題として、解決するための取り組みを教育行政レベルで行う必要があるだろう。

#### 《家庭間格差》

今度は家庭間格差についてみてみよう。家庭環境の違いとなる指標はさまざまあるが、ここでは、教育社会学の研究分野でよく用いられる父親の学歴(大卒か非大卒か)を指標とすることにしよう。

地域差のみられた家庭学習の頻度や1日あたりの勉強時間には、家庭差はほとんどみられなかった。しかし、家庭学習の様子には、さまざまな家庭差がみられた。まず、家での勉強内容をみると、「学校の宿題」(大卒87.9%、非大卒87.2%、以下同)、「学校の授業の予習」(24.1%、22.1%)、「学校の授業の復習」(42.2%、47.4%)といった学校の勉強をする点では家庭差がほとんどみられないのに対して、「塾や予備校の授業の予習・復習」(34.2%、22.7%)、「通信教育」(25.5%、19.0%)、「書店などで売っている問題集・参考書」(22.4%、14.8%)といった、学校の勉強とは別に自分で選んでするような勉強には、父親の学歴が大卒の家庭のほうが6~10ポイント程度多く取り組んでいる。通塾率をみても、大卒53.8%に対して非大卒35.7%と、父親の学歴が大卒の家庭のほうが、学校の勉強以外の勉強をする機会が多い。

ところが、だからといって、父親の学歴が大卒の中学生は学校の勉強をそこそこですませているかということ、そうではない。家での勉強の様子については、「出された宿題をきちんとやっていく」(大卒44.4%、非大卒33.8%、ただし「あてはまる」のみの比率)、「予習をしてから授業を受ける」(大卒46.3%、非大卒39.4%、「あてはまる」+「まああて

はまる」の%、以下同)では、父親の学歴が大卒のほうがより取り組んでいて、学校の勉強もきちんとしているようだ。また、「ラジオやテレビ、CDをつけっ放しで勉強する」(51.0%、60.8%)をみると“ながら勉強”をしているのは、父親の学歴が非大卒のほうに多いことがわかる。父親の学歴にかかわらず、中学生は同じくらいの頻度や時間を家で勉強しているが、その時間に勉強している内容や密度には違いがあるようだ。

学習に向かう姿勢に家庭環境による差がみられたが、学習に対する考え方にも差がみられるだろうか。学力観をみると、父親の学歴が非大卒のほうが、「将来ふつうに生活するのに困らないくらいの学力があればいい」(大卒60.3%、非大卒65.9%、以下同)、「どこかの高校や大学・短期大学に入れる学力があればいい」(45.8%、51.2%)と考える傾向がみられるのに対して、父親の学歴が大卒だと「できるだけいい高校や大学に入れるよう、成績を上げたい」(68.7%、58.1%)と考える傾向がみられる。実際、進学希望にも「四年制大学まで」+「大学院まで」(53.6%、25.2%)という高等教育進学の希望には、大卒と非大卒で倍の違いがみられるのである。

なぜ父親の学歴の違いが、学習に向かう姿勢や考え方に、こんなに大きな差をもたらすのだろうか。そこで家庭環境をみてみよう。「ほとんど毎日、親は私に『勉強しなさい』と言う」(大卒36.4%、非大卒31.5%、以下同)では数ポイントほどの差しかないのだが、「この1か月の間に、親に勉強をみてもらったことがある」(34.7%、26.2%)、「お母さんは私の成績をよく知っている」(85.4%、78.2%)、「お父さんは私の成績をよく知っている」(60.7%、47.8%)では10ポイント前後の差がみられ、父親の学歴が大卒の家庭のほうが、単に勉強するように言うだけではなく、子どもの勉強にかかわりをもとうとしている傾向がある。また、「親は毎日、新聞を読んでいる」(82.9%、64.2%)、「親に博物館や美術館に連れていってもらったことがある」(48.3%、

29.5%)では、約20ポイントも父親の学歴が大卒のほうが多い。このような社会勉強や生涯学習の機会を親と共有することは、学習が学校で勉強することにとどまらないことや、学校で学習したことが社会のさまざまな場面につながっていくことを知るきっかけにもなるだろう。

つまり、父親の学歴の違いは、単に父親の学歴が高いか低いかということではなく、中学生の学習を支える家庭環境にも大きな違いをもたらしており、そのことが彼らの学習に向かう態度に大きな差をもたらしていると考えられる。地域差と同様に、家庭環境もさまざままで、教育方針も家庭ごとに皆違うのは当然だ。しかし、中学生自身が好むと好まざるとにかかわらず、家庭によって彼らに提供できる学習環境に違いがあったり、学習に対する考え方に違いがあったりすることで、学習の量や内容や意味づけ方に違いが生じ、それが結果として得られる知識や学歴の違いにまでつながっていくとしたら、それは家庭間格差の問題として、学校や教育行政がその格差を補償するような取り組みを講じる必要があるだろう。

#### ④ 成績差

第四の特徴は、成績差が大きいということだ。高校受験を1年あまり先に控えて、将来のことを具体的に考えるようになる中学2年生であれば、高校選択の大きな指標となる成績によってさまざまな差がみられるのは致し方のないことだ。しかし、同じように公立中学校に通っている段階でこんなに大きく開いてしまうのだろうかと思ってしまうほどの差がみられる項目がいくつもあった。

まず、成績との関連の深い授業の理解度をみてみよう。「ほとんどわかっている」+「70%くらいわかっている」の比率を教科ごとにみると、「国語」(上位79.9%、中位57.1%、下位28.7%、以下同)、「社会」(66.7%、45.9%、21.2%)、「数学」(83.3%、64.0%、34.1%)、

「理科」(77.4%、55.3%、31.2%)、「英語」(74.6%、45.9%、20.5%)となっている。とくに「英語」では、下位で47.9%と半数近くが「30%くらいわかっている」+「ほとんどわかっている」と答えている。「英語」は中学校に入ってから始まる教科であり、他教科に比べて学習の積み重ねが少ないにもかかわらず、すでにこれだけ大きな理解度の差がついてしまっている。

調査では、成績について学年内での相対的な位置をたずねているので、「みんな一定程度の理解度はあるが、成績差はついてしまう」という状態でもよいはずだが、どの教科も非常に大きな理解度の差があることがわかる。こんなに理解度に差があっては、同じ教室で同じ授業を受けても、授業が成り立たないのではないかと心配になる。

では、どうしてこんなに理解度に差がついてしまうのだろうか。授業中の様子を見てみよう。「黒板に書かれたことを、きちんとノートに書く」(上位92.0%、中位86.7%、下位72.3%、ただし「よくある」の比率のみ、以下は「よくある」+「時々ある」の%)や「黒板に書かれていなくても、先生の話で大切なことはノートに書く」(67.6%、60.5%、46.7%)では、上位層と下位層で約20ポイントもの差がみられる。また、「授業でわからないことは、あとで先生に質問する」(43.7%、41.5%、26.6%)でも、上位層のほうからわからないことを先生に聞いてわかろうとする努力をしている。それに対して「授業中にいねむりをする」(22.0%、31.2%、38.3%)、「近くの人とおしゃべりをする」(56.4%、58.8%、64.0%)といった逸脱行為は、下位層のほうが多い。教師は同じ教室にいる生徒に同じように授業をしているつもりだったとしても、生徒のほうは成績によってぜんぜん違う授業の受け方をしているのである。

今度は家での学習の様子をみてみよう。家庭学習の頻度では、「ほとんど毎日する(週に6~7日)」(上位37.0%、中位28.2%、下位22.0%、以下同)に対して「家ではほとん

ど勉強しない」(15.7%、17.1%、26.7%)は、成績差が非常に大きい。また、勉強のしかたでも、「教科書やテキストをくり返し読む」(64.3%、56.9%、51.6%、「よくする」+「時々する」の%、以下同)、「辞書(英語・国語など)を引く」(41.9%、36.6%、33.2%)といった基本的な勉強でも、上位層のほうの下位層より10ポイント程度多くしているが、「教科書や参考書を整理して自分のノートを作る」(57.1%、54.3%、39.2%)、「プリントや問題集で数学の問題練習をする」(82.3%、78.8%、64.6%)といった応用的な学習にいたっては20ポイント近い差がついているのである。

さらに通塾率(上位50.5%、中位46.1%、下位35.1%)でも、上位層のほう約15ポイントも多く塾に通っているし、その塾も上位層では37.6%が「高校を受験するための進学塾」に通っているが、下位層では70.5%が「学校の勉強がわかるようになるための補習塾」に通っている。

以上のように、成績差は、授業の理解度、授業の受け方や授業中の態度、家庭学習の頻度や勉強のしかた、通塾と、学習のあらゆる場面で10~20ポイント程度の大きな差となって表れているのである。

成績差は、学習に対する考え方でも大きな差となっている。まず学力観についてみると、「将来ふつうに生活するのに困らないくらいの学力があればいい」(上位52.8%、中位67.8%、下位71.3%、以下同)と下位層のほう20ポイント近くも多く思っているのに対して、「できるだけいい高校や大学に入れるよう、成績を上げたい」(69.8%、63.2%、55.2%)と思っているのは上位層のほう15ポイント近く多い。そして「学校生活が楽しければ、成績にはこだわらない」(21.0%、26.3%、37.2%)と下位層のほう上位層より15ポイント強も多く思っている。同じ学校で同じ授業を受けていても、勉強に対する姿勢はもちろん、学校生活の過ごし方に対する考え方にもずいぶん大きな違いがみられるのだ。

ところが、下位層の中学生は楽しく学校生活を送っているのかというと、そんなことはなく、学習についてさまざまな悩みを抱えている。とくに「自分は生まれつき頭が悪いのではないかと思う」(上位14.0%、中位35.6%、下位54.9%、以下同)、「小学校までにもっと勉強しておけばよかった」(21.4%、38.9%、51.2%)、「努力しても成績が思うように上がらない」(30.6%、48.0%、58.9%)では約30~40ポイントの差で、下位層のほう悩みを抱えている。これらの項目に共通するのは、中学生自身の経験や内面にかかわる悩みという点だ。このような悩みをもった中学生に、単に「もっと勉強しなさい」といった勉強のしかたを教えたりしても、それですぐに成績が上がって悩みが解決するものではないだろう。

最後に進学希望についてみてみよう。「四年制大学まで」+「大学院まで」(上位56.3%、中位36.4%、下位19.4%)という高等教育進学の希望には、上位層と下位層でおよそ3倍の違いがみられる。在籍する高校の学科や入試難易度で将来の進路が可視的になる高校ならまだしも、中学校もやっと半分終わったくらいの段階で、これだけはっきりとした進学希望の差がついてしまっているのである。

成績差は、学習に関するさまざまな悩みをもたらしているばかりでなく、すでに中学2年生の段階で、将来の進学希望について、モチベーションの差をもたらしてしまっている。社会学者の山田昌弘氏が現在の日本について「希望格差社会」であると論じているが、まさしく、中学2年生にして「勉強しても報われない」と思ってしまった子どもたちから「希望」が失われつつあるのではないだろうか。

## 4. 今後に向けて ～格差ではない多様化の実現のための課題

前述したように、2001年からの5年間で、中学生の学習に向かう姿勢や考え方は、まじめになったし、学習するようになった。一方で、地域・家庭間格差や成績差が大きいこともわかった。第4回の調査対象者は、公立中学校に通う生徒たちだけである。「2. 2001年以降の中学校教育をめぐる動き」で概観したように、ここ数年で中学校の多様化は非常に進んでおり、多様なタイプの中学校に通う生徒たちは、今回の調査には含まれていない。公立の中高一貫校はますます増えていく計画になっているし、東京都では中学生のおよそ4人に1人が私立学校に通っている。公立中学校に通う生徒だけでもこれだけの差がみられるのだが、公立中高一貫校や私立中高一貫校に通う生徒と公立中学校に通う生徒とでは、学習に向かう姿勢や考え方は非常に大きく違っているだろう。公立中学校間でも、学校選択制が広まっていけば、今までのような「どこへ行っても同じ教育が受けられる公立中学校」ではなく、「あそこはこういう教育が受けられる公立中学校」へと変わっていき、学校間の差がもっとはっきりしてくることだろう。同じ公立中学校のなかでも、選択教科の授業時数が増えてきたことで、ある教科をたくさん勉強する生徒と少ししか勉強しない生徒が出てくることになる。習熟度別に選択授業を選ぶことになれば、生徒たちは制度的組織的にグルーピングされ、成績差が可視化されていくことになるだろう。

中学校が多様化することで中学生の学習に向かう姿勢や考え方に違いが生じること自体はいけなこととは思わない。しかし、中学生が置かれる環境の違いで生じる学力の差によって、十代の早いうちから将来の進学希望や職業希望にまで大きな格差が生じてしまっているのではないだろうか。

第4回の結果を踏まえたとき、中学校がこれからますます多様化していくにあたり、配

慮していくべきだと考える点が5点ほどある。その5点を示して本章のまとめとしたい。

### ① 一定の学力水準の維持

中学生の学習に向かう姿勢はまじめになったし、学習するようになった。しかし、それは第一に量が増えたというだけのことであり、第二に平均的には増えているが、同時に偏差も広がっているのである。基礎・基本を中心にした「確かな学力」とはいったいどの水準なのかを明確にすることもさることながら、学力観も大きく変わりつつある。学習させる量を増やすだけでなく、望ましい学力とは何かを模索しながら、一定の学力水準を維持するために必要な学習環境の整備と中学生の学習に向かう姿勢づくりを図っていく必要があるだろう。

### ② 「受け身」「学校に閉じている」の解決

中学生の学習に向かう姿勢はまじめになったし、学習するようになった。しかし、そのまじめさは受け身なものだったし、その学習は学校に閉じているものだった。学力低下という批判にはある程度応えられたものの、1990年代から取り組まれてきている新しい学び方や自ら課題をみつめてそれを解決していくという姿勢は定着していない。また、身近な結果に振り回されて、学校の成績を上げることに関係のない、社会勉強や生涯学習につながるような学習や、学校で学んだことをきっかけに深まった知的好奇心を満たすようなプラスアルファの学習をしていない。だが、おとなになったら、こういう姿勢や学習こそが大切になってくる。量の問題がある程度クリアしたら、今度は「能動的なまじめさ」や「学校から広がっていく学習」が身につくように、質の転換とその定着を図っ

ていく必要があるだろう。

### ③ 格差の解決

中学生の学習に向かう姿勢や考え方について、地域・家庭間格差や成績差が非常に大きかった。中学校の多様化が進む過程で、地域・家庭間格差がそのまま残されていると、学習環境面で恵まれた地域や家庭の中学生が、学習環境面で評判のよい中学校に通うなど、その格差はますます増幅される危険性がある。また、すでに述べたように、差があること自体は必ずしもいけないこととは思わないが、あまりに早い段階で成績差が開いてしまうと、成績下位層の中学生が希望を失ってしまい、成績差がそのまま高校以降の進学希望や職業希望の差につながってしまう危険性がある。このように、中学生のうちから分化が進んでしまったら、彼らがおとなになったときの社会がどのようなのかと考えると怖さを感じてしまう。

子どもたちが学習し始めるにあたって、同じスタートラインを想定して、一人ひとりの個性に応じた多様化を図るだけでなく、地域や家庭の環境の異なるスタートラインを想定して、その差異を補償するような多様化もあっていいのではないだろうか。また、一人ひとりの個性に応じて力を伸ばすにあたって、子どもたちのもつ“力”とは学力だけではないだろう。たとえば、部活動や学校行事での活躍がきっかけで進学や職業の展望が開けていく場合もある。学力以外の可能性を提示するような多様性もあっていいのではないだろうか。地域や家庭の差異を補償したり、高校や大学の入試教科になるような科目の学力以外の力を評価したりするような多様化を図っていく必要があるだろう。

### ④ 性差の問題

本章のなかでは具体的にデータをあげて触れることはしなかったが、性差の問題がある。

男子と女子では、好きな教科や得意な教科が違う。学習に向かう姿勢や考え方も意外なほどに違う。進学希望も、希望する学歴段階や学科、学校の特色などではっきりした違いがみられる。しかし、「女子はそれほど勉強をがんばらなくてもいい」「数学は男子のほうが向いている」と思っている（「とてもそう思う」＋「まあそう思う」の％）中学生は2割ほどしかいない。

おそらく、教師が教科の授業場面で男女に差をつけて指導することはほとんどないだろう。しかし、学校のなかには、男女差があることを意識させられる場面がしばしばみられる。たとえば、部活動では、男子部と女子部とに分かれている部や、そのように分かれていなくても、事実上男子しか入れない部があったり、女子が圧倒的に多い部があったりする。学校行事や生徒会では、伝統的な性別分業観に基づく役割分担が行われている場合もある。そして、進路指導にあたって、「女子なんだから」と、理数系やより高い進学希望を閉ざされることもあるようだ。このように、学校生活における性差の問題がまだ残っているようだが、多様化が進む過程で、学習面以外での学校改革もまた図っていく必要があるだろう。

### ⑤ 社会観・価値観の転換

本章では、調査結果からみえてくる中学生の特徴として、「まじめだが受け身」「学習するが学校に閉じている」「地域・家庭間格差」「成績差」の4点をあげた。まじめになったことや学習するようになったことにも留保をつけたように、問題点を指摘した特徴の記述になっている。だが、それは中学生だけの問題だろうか。実は、おとなもまた同じような問題点を抱えているのではないだろうか。おとな向けに言い換えれば、「まじめだが受け身」「働くが職場に閉じている」「地域・家庭間格差」「業績差」といったところだろうか。私たちおとなの社会観や価値観が

このような特徴をもっているから、子どもたちもまた指摘したような特徴をもってしまったのではないだろうか。子どもたちに「勉強しなさい」と口でいうのはたやすい。しかし、おとなたちは、勉強することやその結果のすばらしい社会を身をもって示していないので

はないだろうか。おとなが身をもって示さなければ、子どもたちはついてきてくれない。なぜ学ぶのか、その結果どんなすばらしいことが待っているのか、子どもたちが思い描きやすい見本となるような社会をおとなたち自身がまず築きあげていく必要があるだろう。

## 第 2 章

# 中学生の学習に関する 意識・実態

- 邵 勤風 (1 節 1 項)
- 鈴木 尚子 (1 節 2・3 項)
- 宮本 幸子 (1 節 2 項、2 節 6 項)
- 木村 治生 (1 節 4 項)
- 十河 直幸 (2 節 1 項)
- 西島 央 (2 節 2・3・7 項)
- 諸田 裕子 (2 節 4・5 項)

